

新刊紹介

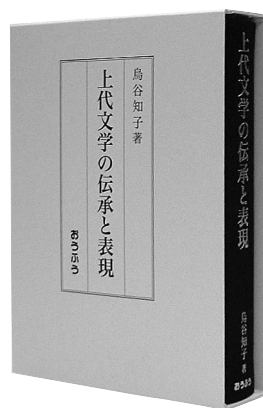
鳥谷知子著

『上代文学の伝承と表現』

松本直樹

学界待望の鳥谷知子氏の著書が刊行された。序章を含め二九編もの論文を収録した六四〇頁にもおよぶ文字通りの大著である。所収論文の多くは本誌、すなわち著者が教鞭を執られている昭和女子大学近代文化研究所発行の機関誌「学苑」に掲載されたものであり、そのうち最も古いものは一九八五年にまで遡る。「学苑」といえば、一九七〇年代から九〇年代にかけて尾崎暢映や升田淑子といった研究史上に名を残す先学の論文を掲載してきた歴史がある。その後継者でもある鳥谷氏の本書は、昭和女子大学における、また「学苑」誌上での上代文学研究の伝統を今に受け継ぎ、その歴史の一部を成す著作であると言ってよい。

本書は全三部から成っている。第一部「古事記神話・説話の表現」は、『古事記』上巻の「神代」から中巻・下巻の歴代天皇記までをほぼ記載順に論じた『古事記』の作品論である。上巻と中巻の



2016年6月15日発行
おうふう
A5判 640頁
定価 本体15000円＋税

接続については、第三章「古事記上巻から中巻へ―神話と人の世をつなぐ表現―」が、中巻から下巻へは、第六章第二節「春山之霞丈夫と秋山之下氷丈夫」の物語の意義」がそれぞれ用意されている。『古事記』の三巻構成についても目配りがなされている。第二部「説話と歌謡」は、神婚説話や歌謡といった古代日本の「伝承」のありようを論じたもの、第三部「天武・持統朝の思想と表現」は、主に『万葉集』所収歌の考察を通して『古事記』が編まれた時代の信仰・思潮を論じたものである。

紙幅の都合もあるので、いくつかの章・節に絞って具体的に紹介しよう。第一部第二章第一節「須佐之男命―そのさすらいをめぐって―」では、『古事記』におけるスサノヲの神格とそれが成り立った経緯について論究する。『古事記』においてスサノヲは、日向―高天原―出雲という垂直の

世界を移動し、さらに子孫の大国主神を通じて、出雲・因幡・越にまで影響力を行使する、文字通り縦横無尽にさすらい、版図を広げてゆく神である。「スサ」の神名が意味するところのススム（進）、スサブ（荒）性格を強調された姿であり、それは風雨の神としての性格にも結びつく。風雨は時として社会に甚大な被害をもたらすが、いっぽうで農耕の繁栄にも欠かすことの出来ない要素である。こうした神の出現は、風神・雨神・農耕神らの祭祀上の統治を目指した大和王権の施策によるものであるが、王権神話の構想のもとでは、農耕に有益な風雨の支配力は天孫側に集約され、スサノヲ自身は出雲に、根の堅州国に鎮まる結末を迎えることになったと結論づける。風神らをめぐる大和王権の祭祀構想については、第三部第一章第一節「穴師の神―風神の信仰―」に詳しい。動乱の天武朝では、風雨のすざびを抑えることが、戦いに勝利し、版図を確定するための前提であると考えられ、そのために風神らに対する国家的祭祀の必要性が再認識された時代であったという。こうした政治的、思想的な背景を踏まえてこそ、『古事記』において縦横無尽にさすらい、最後に鎮まるスサノヲ像が形成されたことの必然性を説明することが出来ると説く。

第一部第二章第二節「天照大御神と高御産巢日神―常世から高天原へ―」は、天の石屋戸神話を通して、太陽神アマテラスが皇祖神へと昇格してゆく『古事記』の文脈を確認し、天武・持統朝に大和王権の神話空間として高天原が確立されていた過程とを重ね合わせて理解すべきことを説く。海の彼方に設定された常世国は、もとより太陽神の原郷であったに違いない。この水平的世界観が、やがて「高天原―葦原中国」という垂直的世界観へと展開するのが天武から持統にかけての時代である。天武は飛鳥浄御原に宮都を置き、和風諡号を「天淳中原瀛真人天皇」と称する。持統は藤原に宮都を構え、その和風諡号は「高天原広野姫天皇」である。「原」は大和王権の祭政空間を示すと思われるが、二代の諡号の「瀛」と「高天原」は、水平的世界観から垂直的世界観への展開を示している。こうした大和王権における垂直的神話世界の確立とともに、アマテラスは常世国の太陽神から高天原の皇祖神へと昇格を遂げていったと説く。垂直的世界観の確立については第三部第一章第三節「持統天皇の斎会歌考」に詳しい。ここでは『万葉集』一六二番歌を取り上げ、伊勢と関わりの深い常世国の信仰が垂直的な世界観と結びついて「日の皇子」思想が形成されていた跡を見届ける。そこには道教思想が少なから

ず介在しているが、その点については同第二節「持統天皇の天武天皇挽歌―第一六〇・一六一番歌の背景―」に詳述されている。水平的神話世界と垂直的神話世界とが交錯する様は、ヤマトタケルの葬送場面にも表れており、そこでは歌謡において舞台としての海を提示しながら、地の文においてタケルの霊を昇天させていると指摘する（第一部第五章「倭建命伝承」）。また、前述したさすらいスサノヲの活動域（第一部第二章第一節）とも関わってこよう。

このように各章各節が交互に関わり合いながら、本書全体が一つの論として成り立っている。序章の中で著者自身が述べているように、全体の四分の三を占める第一部が本書の中心であるとも言えるが、この列島の上の思想・信仰が、神話伝承・歌謡といった様式を通していかに継承され、いかに変遷を遂げて、天武・持統の時代を迎えたかを論じた第二部・第三部の存在が、第一部の『古事記』研究に厚みを与え、時代的な動きの中で『古事記』という王権の史書が作られていく過程を視野に入れた、いわば動的な作品論へと昇華させている。本書の価値は、第二部・第三部の基礎の上に、第一部を置くことによって、真に評価されるべきものである。その意味でも、著者が三十年以上の長きに亘って発表されてきた論文が、このよ

うな一冊の研究書に纏められたことの意義は大きく、改めて一編一編の論文の真価が発揮されていると言える。その点、歌謡に関する論文を含んだ本書が、第三四回日本歌謡学会志田延義賞に輝いたことから明らかであろう。

東アジアに浮かぶこの列島には古来より数知れぬ神々が息づいていた。そこに様々な舶来の思想が入るなどして、列島上は新旧、内外の様々な思想・信仰が渦を巻く状態であっただろう。やがて列島の精神史上に『古事記』の王権神話を擁する「日本」という国家が出現し、「日本文化」―列島の上にあった諸文化ではなく―が誕生することとなる。そんな我が国古代の精神史を映し出す一つのドキュメント作品を読んでいるような感覚を覚えながら、本書を読了した。本書は主として『古事記』を扱ったものであるが、『日本書紀』を中心に据えた時、見える景色は同じなのか、或いはどのように違うのか。今後さらなるご教示を願いたい。

（まつもと なおき 早稲田大学教授）